

全然満足はできないが、目指すと決めた方向は間違っていないと思った

東京、パリンピックの陸上に初出場した大島健吾選手(三)は名古屋学院大学法学部四年、瀬戸市。三種目でトラックを駆け、混合400メートルユニバーサルリレーでは銅メダルを手にした。瀬戸西高校時代はラグビー部。陸上を始めるきっかけを与えた恩師や、急成長を支えた大学の指導者にも快挙に沸き、さらなるレベルアップを願った。

(伊勢村優樹)

大島選手さらなる高みへ



瀬戸西高ラグビー部の正道監督



名古屋学院大学陸上部の松田部長

四日夜、今大会最後のレースとなった200メートル(義足T64)決勝に臨んだ。23秒62で八位に終わったが、「しっかりと自己ベストを出せた。全然満足はできないが、目指すと決めた方向は間違っていないと思った」と振り返った。

生まれつき左足首から先がないものの、ハンディと感ずることも特別扱いされることがなかった。中学まではサッカーや水泳、卓球に取り組み、瀬戸西高では日常用の義足をはいて、花園出場歴のあるラグビー部でプレー。スクラムで相手を押し込み、タックルでぶつかり合うことも多いフラインカーとして試合にも出ていた。

転機は高校二年の時。ラグビー部の正道監督(右)から勧められたパラ選

3種目出場、リレーで銅 恩師ら快挙に沸く

飛躍の背景には、名院大陸上部の松田克彦部長(左)の存在も大きかった。十種競技の元日本記録保持者。指導者としても平成国際大会時代に選手たちを国際大会や箱根駅伝に導いた名伯楽が献身的に支えた。

「おとなしく、決して速くもなかった。出会った時の印象を語る松田部長は、大島選手の強い向上心と課題をどう解決するか常に考えて努力してきた結果が活躍につながったと考えている。」「健常者を超える」を最終目標に掲げるまな弟子に、「彼は10秒台を出すと言っている。さらなる上を目指してほしい」と期待を込めた。

二人の恩師らへの感謝を胸に、東京、パラに臨んだ大島選手。全種目を終え「思っていた以上に海外選手と力の差があった。今後強くなるためのいきつかけの大会になった」と次のパリ大会でも活躍を誓った。

※この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています

許諾番号:20210922-26650

(c) 中日新聞社 無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています